

U 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5
○ ○ ● ○ ○

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

「生きる主体」が成立しているとは、どういうことなのだろうか。主体(あ)が成立している・いないという違いを形作るものは、何なのだろう。

いのちあるものが生きているとき、そこに「生きる主体」がいるといえるためには、「そう生きているのは私だ」という一人称の思考が生じている、少なくとも生じうるものでなければならぬ。では、こうした「一人称の思考」とは、どういう思考なのだろう。

^(イ)主体であるために不可欠な一人称の思考には、際立った特徴がある。いま、あることが頭をよぎり、突然に恐怖を感じたとき、このとき、「恐怖感が生じている、はて、この恐怖を感じているのは誰だろう」という問いは、意味をなさない。少なくとも、誤って答えてしまうという可能性がない以上、この問いは、疑問文としての意味をなさない。したがって突然の恐怖感とともに、「私は怖ろしさを感じている」という一人称の思いをいだいたとき、恐怖を感じている主体(イ)を取り違えたがゆえに、いだいた思いが偽になる、^(ロ)という可能性はない。

これに対して、「Aさんは恐怖を感じている」という三人称での思考のばあいには、じつさいに怖がっているのは実はBさんであってAさんではない、ということとは十分ありうる。気付かずしてAさんとBさんを取り違えてしまったときには、「Aさんは恐怖を感じている」という思いは偽となる。しかし、現に生じている経験にかんする一人称の思考においては、主体を取り違えるがゆえに偽となる、ということはない。なるほど、じつさいには痺れているだけなのに「私は痛みを感じている」と思ってしまうことはあるかもしれない。しかし、その場合でさえ、「そう感じているのは、私だ」という思いが偽となることはない。これは、一人称の思考の際立った特徴である。

この特徴は、一見すると、簡単に説明できると思えるかもしれない。いわく、「私は恐怖を感じている」という文は、「現に恐ろしい感じがする」ということを表わしているにすぎない。つまり、体験の表出で使われる「私」

という語は、「いま現に」という体験のされ方を修飾しているにすぎず、その点で、この語は、ある特定の人物を指す指示語ではなく、むしろ副詞である。よって、現に恐怖感が生じているときには、「私は恐怖感を感じている」という文は、自動的に真になる、云々。なるほど、これは、すっかりした説明ではあるが、しかし、ある重要な点を素通りしている。

そもそも「現に」という副詞は、「現像上で」等々と対比して経験された方を限定するにとどまるが、「私」という語は、「他の誰でもなく」という対比を意味しており、そうであるがゆえに、まさにこの語を発している当の人物を指す。それは、ちょうど「ここ」という語が、「そこでもなく、あそこでもなく、他のどこでもなく」という対比を意味しており、そうであるがゆえに、その語が発話されている場所を指すと同様である。このように「ここ」も「私」もある特定の位置・人物を指しているのであって、たんに体験のされ方を修飾しているのではない。したがって、「私は痛みを感じている」という一人称の文は、たんに「現に」痛みが感じられている、というにとどまらず、「痛みを感じているのは、私であって、他人ではない」ということを意味し、そうであるがゆえに特定の人物T・Oを指して語っている。「私」という語は、その語の意味からして、a にはあるけれども、特定の人物を指す指示語であり続ける。

したがって、「……と感じて・思っているのは、他の人ではなく、私だ」という一人称の考えは、「感覚を感じ・思いをいだく者は、ほかにたくさんいる」という三人称の事実を前提としている。痛み・安堵といった感覚・感情をいだき、さまざまな思いをいだくのは、なにも私ひとりではない。これは、あまりにも当たり前前に響くけれども、この前提が外されてしまったら、「ほかの誰でなく、この」という限定もまた、およそ意味をなさず、この限定が無意味なところでは、そもそも「私」という一人称の語は、意味をなさない。

このように私もまた、現に感覚を感じ・思いをいだくことのできる無数の者たちのひとりでしかない。いや、ひとは誰しも、「私」という語を用いて自分自身を指して語るのであって、私もそうした数十億の人々のうちのひとり、有b 無c のワン・オブ・ゼムでしかない。

にもかかわらず私は、「私」という語を用いて私自身を指すことができる唯一の主体である。もし、誰かが「私は大庭健だ」とか「私はどうして私なのか」という本を書いたのは私だ」などと語ったなら、私は抗議してテッカイを求める。他の誰も、私ではないし、私ではありえない。私は、そうした唯一の主体である。

では、私は、どのような仕方、ほかの誰とも違うのだろうか。そもそも一匹のゾウリムシであれ、いや一粒の砂でさえ、ひとたび「この」と限定されて指されるかぎり、ほかのどれとも区別される唯一のゾウリムシあるいは砂粒である。では、私は唯一の主体だということも、これらのゾウリムシたちが、それぞれに唯一だということと同じなのだろうか。そうではない。

感覚・思考と私との間には、ほかにありえない関係がある。感覚・思いをいだく者たちが何億・何兆人いようとも、「この」感覚・思いをいだいているのは、私だけである。胃がキリキリと痛みはじめたとき、その痛みを指して「この痛み」と語れるのは、ひとり私だけである。ほかの人々は、「その痛み」・「あなたがいう痛み」と語ることができても、「この痛み」と、痛みを指して語ることはできない。なぜなら、現に感じている痛みを、「この」・「これ」という仕方で指せるのは、その痛みを「じかに」感じている私だけだから、である。あるいは、かつての激痛が思い浮かんだとき「あの痛み」という語でそれを指せるのは、かつて現に痛みを感じた私だけだからである。

生きるということは、そのつど、ある感覚を感じ、ある思いをいだく、ということを重ねていくことである。「……と感じ・思っているのは、私だ」という一人称の思考をいだける主体であるかぎり、私たちひとりひとりの生は、誰かに代わって生きてもらうことができない唯一の生であり、そうした唯一の生として理解されている。

(大庭健『いのちの倫理』による)

(注) T・O——大庭健の頭文字。本文の著者。「私はどうして私なのか」という著書がある。

問

(A) 〓 線部を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 〓 線部(あ)(う)の「主体」について。それらの説明として、正しいものを1、正しくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ (あ)の「主体」は人の内面の意味で使われている。

ロ (い)の「主体」は一人である者という意味で使われている。

ハ (う)の「主体」は感覚をいだく者の意味で使われている。

ニ (あ)の「主体」と(う)の「主体」は同じ意味だが、(い)の「主体」だけが違う意味で使われている。

ホ (い)の「主体」と(う)の「主体」は同じ意味だが、(あ)の「主体」だけが違う意味で使われている。

(C) 〓 線部(1)について。「思いが偽になる」とはどういうことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 思いがその対象によって裏切られること

2 その思いが自分の他の思いと一貫しないこと

3 思いの内容が人の真情を表現していないこと

4 思いの内容が現実のできごとに合わないこと

5 その思いが他人の思いによってゆがめられること

(D) 〓 線部(2)について。「この語」すなわち「私」という語が「副詞」だと言われるのはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 「私」を省略しても文の意味が損なわれないから。

2 「私」が「いま現に」を修飾する語であるから。

3 「私」が体験の表出になくはならない語であるから。

4 「私」が恐怖を感じる事が自動的に真であるから。

5 「私」が「感じている」の修飾語として働くから。

(E) 空欄 [a] にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 再帰的 2 反復的 3 抽象的 4 比喩的 5 蓋然的

(F) 空欄 [b] および [c] には同じ漢字一字が入り、四字熟語を形成する。その漢字一字を記せ。

(G) 線部(3)について。このことの説明として最も適当なもの一つを左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 人は「この」という限定を受けると唯一の主体になる。

2 「私」と称して主体になれるのは他の人でなく自分だけである。

3 自分に痛みを感じない人は唯一の生きた主体にはなれない。

4 私自身の感覚をじかにいざくことができるのは私だけである。

5 他と区別できる固有名が自分を唯一の「私」にしてくれる。

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 主体の際立った特徴に主体が誰かという問いを無意味化する性質がある。

ロ 「ここ」と「私」は何かを特定するという機能においては同じである。

ハ 一人称が誰であるかの自明性は主体が他の誰とも無関係に成立することを意味する。

ニ 一人称の「私」の特定の仕方と感覚の「じかに」の特定の仕方は同じである。

ホ 「生きる主体」は感覚と一人称の思いが結びついて唯一の主体だと理解されて成立する。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

(注¹) 木村伊兵衛が興味を示すものは、日常性の中にある「身振り」である。私は割合最近になって彼の写真には人
のいない風景が意外にあるのに気がついたが、この風景自体がある種の身振りにシントウ(4)されているのである。

彼の写真に登場する人物たちは、決して特異な行動をしているわけではない。戦場でも、政治的なたたかいの場
でもない。農作業の手を休める女であったり、下町の祭りに来た楽しげな人々である。歩道に立ちどまって、何
かに注意をひかれている若い男女だったり、語り合うカップルだったり、犬を連れて歩いている貴婦人や紳士で
あったり、ガラスごしに見えるカフェーでタバコに火をつけている水夫であったりするだけである。一九三〇年
代のはじめ、(注²)『光画』に発表した「下町の子供たち」以来一貫したこの態度を考えてみると、彼はそれだけで表面
的な意味をつくってしまう異常な行為や出来事を意識的に排除していると思える。そうすることでむしろ身振り
が表面的な行為を上まわって意味を形成するようになる。それが人間にとつての世界という、ある感覚的で具体
的なものを構成することを、ほとんど本能的に感じとっていたに違いない。彼の写真は、生まれたばかりのイメ
ージであり、その結末がどうなるかはわからぬドラマである。かつて、私は木村伊兵衛のこのような「現実」感
を、(注¹)風俗的なものだと考えた時期があった。これは誤解であり、むしろ日常性にとどまり、日常的な身振りから、
世界の具体性という観念にいたる志向性をもつ感性であったと訂正すべきであろう。それは彼のまなざしが、市
井の人々のあいだに生まれ、そこで養われた構造をもつことを示すものであった。彼がいまになって、いっそう
われわれをひきつけるのも、決して、彼の「傑作写真」ではない。(注²)
がいま別のことで通っているものとかなり交差しているように思える。いわゆる「傑作写真」として位置づけ
られてきた彼の写真を、あらたに編み直すなら、これまではあまり意識されなかった面がもつとはつきりあらわ
れてくることは容易に予想できる。

(注³) きわめてソフィスティケートされた観念に踏みこみ、現実の意味や政治的状况とかかわらねばならなくなつて

いるわれわれが、常に立ち返って眺める意義を認めないわけにはいかないのも、また、やはりそこにとどまっていられないのも、日常的なるものの意味をめぐってであるように思える。木村伊兵衛を考えることは、われわれの日常性のパラドクスに触れることでもある。

彼は、かつて文芸家の肖像写真を撮った頃（昭和七年）を振り返って、あらかじめいろいろ調べたり、その人物についての観念をつくりあげてしまうことはなるべく避けるようにした、と書いている。この、計画し予測することを避ける極めて経験的な知恵は、次のようなことを意味しているに違いない。彼にとっての「真実」は、経験に先立ってことばであらかじめ構成される観念ではなく、目の前にいる当の人物の身振りの中にしかあらわれなかったのである。実際身体というのは図式的なものではなく、境界のあいまいな、一種の空間のようなものでしかない。身体はいつもこの中を少しずつ動きまわっている。それをよく観察するうちに、ことばにはならないが、いかにもその人らしい身振りへの偏差が生じているのに気がつく、ということであつたのだろう。これは、ことばとことばにならぬもの、ことばと映像、ことばと世界についての木村伊兵衛なりの解釈のあらわれがあると考えることができるが、彼は、ことばとイメージの関連やズレを、イメージの初発的な状態では的確にとらえている。そこから先にはほとんど関心がないように思われる。確かにこうしたことは多かれ少なかれすぐれた肖像写真家には必ず見られたことだ。肖像写真は被写体を何らかの形で生きている。ただその生き方がいろいろ違っている。木村伊兵衛の場合のそれは、同じくカメラという機械的な手段を使いながら、ヨーロッパやアメリカの写真家たちの場合とはやはりかなり違っている。木村の青年時代に日本にさかんに紹介されたヘルマー・レルスキーが、肖像を撮るに当たって細かいプログラムを立てたのと対照的である。いまからは何でもないように思えるこの差異を、自分で意識して行うことに木村伊兵衛のオリジナリティーがあつた。私には、その違いは風俗的とはいわないまでも木村伊兵衛の写真が日本人的な感性というものから成り立っているのを感じないではいられない。いわば「間」のとらえ方であり、瞬間と瞬間のあいだをおさえることだつた。

ところで、こうした身振りが見出されるのは、誰かが見ているからである。あるいは見ることはこうした身振

りが浮かび上がって来てはじめて存在する。この身振りが、カクベツの見世物ではない、ひっそりしたその人だけのものであればあるほど、それは誰かが見ていることによって浮かび上がる身振りであることがあらためて印象づけられる。誰が見ているのか。写真を撮る木村伊兵衛か、その写真を見ているわれわれか。このささやかな身振りと目の見えない結びつきそのものが写真であって、そのなかだちによって写されているものとわれわれとが立ちあわされているのである。

このことは、ひとりの人物だけではなく多くの人々の群れをなす「身振り」の場合になるといつそうはつきりして行く。街の中のスナップは、彼がどんなに人々の「動き」の間あいに入っているかを示す。この場合に「動き」は二重になっている。ひとりひとりの身振りとこれらの自立した身振りのあいだの相関的な関係である。木村伊兵衛の写真のきまり方は、この二重の「動き」⁽⁴⁾がもつともふくらみをもち、もつとも多様化する頂点をおさえるのであるが、そのとき、この写真の意味は、ただひとりの写真家の切りとる行為を越えてこれらの関係が存在しはじめるところに生じるのである。つまり、大げさないい方をすれば、写真はもう作者などという観念を離れてしまう。あるいは、そこにいる人々は、もはや作者の眼ではない、もうひとつの眼によって眺められるようになるといつてもよからう。その眼は、身振りというものが誘い出したとも、この身振りそのものが、常にある「世界」を構造とせずさえており、このような構造こそ見ることに含まれるからだともいえるだろう。結局、主観的でも客観的でもないような写真というイメージの構造が、「まなざし」と呼ぶものにほかならないのである。しかもそれは個人である写真家の見る経験の二重性でもある。彼はまさに自分が相手の動きを経験する（見る）ことによつて、自分をも相手をもまだはつきりはしていなかった構造の中に構成するのである。

（多木浩二「身振りとまなざし——木村伊兵衛の息づかい」による）

（注） 1 木村伊兵衛——写真家（一九〇一—一九七四）。

だった。

3 ソフィステイケートされた——ここでは「高度な」「複雑な」の意味。

4 ヘルマー・レルスキー——二十世紀前半に活躍した写真家。クローズアップにより労働者の皮膚をリアルに描写したポートレートで知られる。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。ここで言う「風俗的な」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 日本古来の伝統的な

2 日本古来の因習的な

3 当時の日本にあふれていた卑俗な

4 当時の日本において慣習的な

5 当時の日本における遊興的な

(D) 線部(2)について。「日常性のパラドクス」とはどのようなことか。「日常性は、」で始まり「ものだ。」で終わる説明文を句読点を含めて四十字以内で記せ。ただし、始まりの「日常性は」と終わりの「ものだ。」は字数に含めない。

(E) 線部(3)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 効果的な身動きとのずれ

2 正しい姿勢とのずれ

3 適切とみなされる態度からのずれ

4 標準的とされる所作からのずれ

5 優美な身のこなしとのずれ

(F) 線部④について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 撮影者の眼の動きと、撮影者を離れた「もうひとつの眼」の動き
- 2 被写体の身振りという動きと、撮影する木村伊兵衛の動き
- 3 被写体各人の身振りと、各人の身振りの間に生ずる動的な関係
- 4 被写体各人の動きの間あいと、その間あいのあいだの関係
- 5 二人の被写体の自立していながら調和的なそれぞれの動き

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 木村は、表面的な行為とそれがもつ意味よりも、人の身振りとそれがもつ意味をとらえようとした。
- ロ 感覚的で具体的な人間の世界は、人の身振りが生み出す意味によって構成されると木村は考えた。
- ハ 肖像写真家にとって、経験に先立つことばによって構成される観念は意味をもたない。
- ニ 人の集団を写した写真は、写された人々の身振りの間に関係が存在することで意味が生まれる。
- ホ 写真家ないし写真を見る者と被写体とを、「まなざし」が結びつけるところに写真が成立する。

三 左の文章は、二十七歳で皇位を譲った後嵯峨上皇と、四歳でその跡を継いだ後深草天皇（御門）の身辺のさまを描いた場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解費用紙に書くこと）

太上天皇など聞ゆるは、思ひやりこそ、おとなびさだ過ぎ給へる心地すれど、いまだ三十にだに満たせ給はねば、よろづ若う愛敬づき、めでたくおはするに、時のおとなにて重おもしかるべき大き大臣さへ、なにわざをせんと、御心になふべき事をのみ思ひまはしつつ、
[] めつらしからんとてさわぎ聞え給へば、いみじうはえはえしき頃なり。

御門まして幼くおはしませば、はかなき御遊びわざよりほかの御いとなみなし。摂政殿さへ若く物し給へば、夜昼さぶらひ給ひて、女房の中にまじりつつ、乱碁・貝おほひ・手まり・へんつきなどやうの事どもを、思ひ思ひにしつつ、日を暮らし給へば、さぶらふ人びともうちとけにくく、心づかひすめり。

節会、臨時の祭、なにくれと公事どもを女房にまねばせて御覧すれば、大き大臣興じ申し給ひて、ことさら小さき笏など作らせてあまた奉り給へば、上も喜び思す。入道大き大臣の御女、大納言三位殿といふを関白になさる。按察の典侍隆衡の女、大納言典侍、中納言内侍、勾当の内侍、弁の内侍、少将の内侍、かやうの人びと、みな男のつかさにあててその役を勤む。「いとからいこと」とてわびあへるもをかし。中納言の典侍を権大納言実雄の君になさるるに、「したうづはく事、いかにもかなふまじ」とて曹司に下るるに、上もいみじう笑はせ給ふ。五月五日、所どころより御かぶとの花、葉玉など、色いろに多く参れり。朝餉にて人びとこれかれひきまさぐりなどするに、三条大納言公親の奉れる、根に露おきたる蓬の中に、「ふかき」といふ文字をむすびたる、糸のさまもなよびかに、いと艶ありて見ゆるを、上も御目とどめて、「何とまれ、いへかし」とのたまふを、人びともおよすけて見奉る。弁内侍、

あやめ草底しら沼の長きねに深きといふやよもぎふの露

〔増鏡〕による

(注) 1 太上天皇——讓位後の天皇の敬称。上皇。

2 大き大臣——太政大臣のこと。

3 撰政殿——一条実経。二十四歳で撰政となった。

4 乱碁・貝おほひ・手まり・へんつき——いずれも当時の遊戯。

5 公事——朝廷の政務や儀式。公務。

6 大き大臣——ここでは西園寺実氏のこと。

7 入道大き大臣——ここでは西園寺公経のこと。

8 したうづ——くつを履く時に着用する足袋の類。当時、中納言の典侍は足の病氣だったという。

9 御かぶとの花——紙で作った兜を花で飾ったもの。

10 薬玉——香料を袋に入れ、花で飾り、五色の糸をたらしたもの。五月五日、邪氣払いに用いた。

問

(A)——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 まわりへの気配りの面で、年配らしく落ち着いていらつしやると感じられるが

2 想像してみると、年配で盛りをお過ぎになつたような感じがするが

3 周囲を思いやる気持ちが大人びていて、ふつう以上でいらつしやるように感じるが

4 讓位した寂しさを慰める姿勢が、しつかりすぎていらつしやるほどに感じるが

5 よく考えてみると、年を取りすぎて、讓位の時期を逃してしまわれたような感じがするが

(B)——線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 からかわれやすい雰囲気だ 2 幼さゆえの愛嬌があつて 3 人なつこい表情をしていて

4 慈悲の心に満ちあふれていて 5 温和でやさしい魅力が備わつていて

(C) 線部(3)から読みとれる「大き大臣」の気持ちとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 親愛
- 2 憤慨
- 3 嫉妬
- 4 狂信
- 5 寵愛

(D) 空欄 に入る語として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 いかに
- 2 いかな
- 3 いか
- 4 いかで
- 5 いかによ

(E) 線部(4)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 他愛のない
- 2 心細げな
- 3 愚かな
- 4 空しい
- 5 何にもならない

(F) 線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 気をゆるめがたく、氣遣いするようだ。
- 2 親しくなりにくく、覚悟が必要なようだ。
- 3 心が落ち着かず、気を遣っているようだ。
- 4 仲良くなりにくく、心構えが求められるようだ。
- 5 くつろげず、気を遣い合っているということだ。

(G) 線部(6)は誰のことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 太上天皇
- 2 御門
- 3 女房
- 4 大き大臣(西園寺実氏)
- 5 入道大き大臣(西園寺公経)

(H) 線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 父親の官職の序列にしたがって
- 2 夫の官職の序列にしたがって
- 3 家の格にあわせて
- 4 男性の官職に割り当てて
- 5 男性の役人が役目を割り当てて

(I) 線部(a)と(e)のうち、線部と活用の種類が同じ形容詞を一つ選び、記号で答えよ。

(J) 線部(8)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(K) 線部(9)の現代語訳として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 やわらかで、たいそう輝いてみえる

2 しなやかで、とても優美にみえる

3 すつきりしていて、たいそう艶やかにみえる

4 なよなよとしていて、とても妖艶にみえる

5 しっとりとしていて、深い情がこもっている

(L) 線部(10)のように人々が感じた理由として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 三条大納言が幼い帝を大人扱いしていることがわかったから。

2 五月五日に帝のもとへさまざまな品々が献上されたから。

3 御門が献上品に込められた情趣を正しく理解し、和歌で返事をさせようとしたから。

4 端午の節句の飾りや邪気払いが皆の協力で順調に行われたことがめでたいから。

5 和歌を詠ませる人として、歌人の弁内侍がきちんと指名されたから。

【以下余白】